

■ 論 文 ■

精神分析状況におけるユーモアの治療的使用について

石 川 与志也*

抄 録

精神分析家はユーモアの使用に対して疑いとアンビバレントな態度をとってきた。その中心的な疑義は、それが精神分析状況における分析家の禁欲と中立性を犯す危険性を孕んでいることである。本論文は、先行研究を概観することにより、精神分析の治療的枠組みの中で分析家がユーモアを使用するには何が鍵となるのかを検討することを目的とする。文献の概観と分析により、以下のことが見出された。まず、分析家によるユーモアの使用が問題となるのは、それが分析状況の破壊、すなわち、分析状況における三項関係の喪失をもたらすからである。そして、分析家によるユーモアの使用の鍵は、分析状況における三項関係の生成もしくは回復というユーモア使用の意図を明瞭にすることである。その際、ユーモアを用いる態度が重要となる。さらに、転移反応が先鋭化し治療同盟に基づく三項関係が失われている場面においては、分析家が内的な三項関係を回復することが鍵となる。

Keywords: 精神分析状況, ユーモア, 禁欲と中立性, 三項関係

1. はじめに

ユーモアは、一般的にはよいものとみなされる傾向にある。ブラックユーモアやジョークのように人を傷つける側面があることからユーモアを忌避する人もいるが、人格の豊かさや場を楽しませる才として価値が置かれてきている。

しかし精神分析においては分析状況における分

析家のユーモアの使用に対して疑いとアンビバレントな態度がとられてきた (Barron, 1999)。精神分析の基本ルールである禁欲規則に反し、分析家の中立性を犯すものであることがその中心的な疑義である。ここには患者の転移的欲求を充足するのでなく分析することを一義的な治療的作業として重視してきた精神分析の特徴が現れていると考えられる。ユーモアの意義を主張する論文も散見されるが、その数は極めて少ない。日本においては、北山 (1986) によるフロイトの機知論文の技法的意義に関する論文を除いてほとんどない

* Ishikawa, Yoshiya
ルーテル学院大学

に等しい。

本論文は、これまでの分析家によるユーモアの使用に関する論文を概観することで、分析状況においてユーモアの使用が躊躇されるのは何故か、意義を主張する分析家はどのような治療的意義を見出しているのか、を踏まえ、精神分析の治療的枠組みの中でユーモアを使用するには何が鍵となるのかを検討することを目的とする。そのことにより、精神分析のみならず精神分析的心理療法を含めた精神分析臨床におけるこのテーマの今後の議論と臨床研究が活発化する一步としたい。

筆者は精神分析的心理療法を専門とし、その文脈でユーモアの使用に関わる技法の研究を行ってきた(石川, 2016)。精神分析的な心理療法は精神分析に端を発しているが、精神分析と精神分析的な心理療法は治療構造も訓練体系も異なるため、本来は別々のものとして論じる必要がある。しかし、両者においてセラピスト¹によるユーモアの使用は躊躇されてきている。したがって、精神分析とユーモアの関係を原理的に検討することは両者における技法論の発展に寄与すると考える。

2. 手続き

- (1) 分析状況におけるユーモアの使用についての代表的な文献を概観し、このテーマに関する議論のポイントを整理する
- (2) 議論の争点となっている分析状況における分析家のユーモアの使用について、文献に掲載されている複数の精神分析事例の分析を行い、分析状況におけるユーモアの使用に際して何が鍵となるのかを検討する。

3. 精神分析におけるユーモア

分析状況におけるユーモアの検討に先立ち、本節ではまず精神分析におけるジョークとユーモアの違いとその関係を押さえておきたい。

本研究では、ジョークとユーモアを総称する概念としてユーモアという言葉を用いることにする。フロイトは、ジョークとユーモアを区別して

用いており(Freud, 1905, 1927)、筆者も厳密にはこの両者は区別して用いられるべきものであると考える(石川, 2016)。しかし、細かい区別をすることで議論が煩雑になり、本研究の焦点がぼやけることを避けるために、これまでの多くの研究に倣い(Barron, 1999 他)、ジョークとユーモアの区別をせずに一括りのものとして用いることにする。今後の詳細な技法論の研究においては両者を区別する必要があることを明記しておく。

Freud(1905)は、ジョークは、三人の人、すなわち、ジョークを言う人、ジョークのターゲットになる人、ジョークの聞き手を必要とし、そこでの笑いはユーモアと比べて大きなものとなると述べた。彼は、「機知の機能は初めから、内的制止を解除し、制止によって接近不可能となっていた快の源泉を生産的にする点にある」(Freud, 1905, 邦訳 p.156)と述べている。また、Grotjahn(1957)は、「言葉遊びとナンセンスの快は、抑制と抑圧を取り除く働きをする。したがって、そこに伴う真の快は、二つの異なる源もしくは構成要素を持つ」(p.14)と述べ、「解放の快」と同時にそこに「遊びの快」があることを指摘している。

一方、ユーモアは、それが向けられる対象が基本的には自分自身であり、通常ただ一人だけの人を必要とし、他者の参与はユーモアが成立する要件には含まれていない。他者はそれを聞いて楽しむかもしれないが、ジョークのような大きな笑いにはならない。ユーモアにはジョークと同様に解放的なところがあるが、「それにとどまらず、何か堂々としていて、かつ崇高なところがある」(Freud, 1927, 邦訳 p.269)。この堂々としていところは、「ナルシズムが勝ち誇ることで、つまり、自我の不可侵性が意気揚々と宣言されることから来て」おり、ユーモアの反抗的な性質は、自我の勝利だけでなく、「現実の状況がどんなに厳しかろうともそれに打ち克つことができる快原理の勝利をも意味しているのである」とFreudは述べている(Freud, 1927, 邦訳 p.269)。Freudはこのユーモアの働きを、厳しい現実状況に直面し

怯える自我を俯瞰する位置から見て元気づける超自我の働きとした。

このようにジョークとユーモアは異なるものであるが、フロイトや他の分析家 (Poland, 1990; Baker, 1999; Fabian, 2002) の指摘を踏まえると、ジョークとユーモアには共通性があり、スペクトラムとして位置づけることができると考えられる。すなわち、それは幼児期の遊びに始まり、滑稽さやジョーク、皮肉等の様々な形態を経て、ユーモアという発達ラインの健康な終着点に至るというスペクトラムである (Baker, 1999)。Poland (1990) は、「ジョークは成熟したユーモアへのステップ」(p.219) であると述べ、両者の発達の関係に言及している。彼は、ジョークにおいては、話し手は聞き手を味方につけ厳格な超自我を転覆しようとするのに対して、ユーモアにおいては外部の人間がいようとまいと、自分の欲求不満やタブーを観察するがそれを受容し、痛みを直面しても自分自身と世界における自分の場所を共感的に笑う心地よさを見出すことができると述べている。この指摘は、第三項としてのジョークの対象を他者と共に見て笑う三項関係から、愛情深い超自我という自己内の第三の視点の助けを得て自分自身や世界における自分の場所を第三項として見る内面的な三項関係への発達と言うことができるだろう。

4. 分析状況における分析家によるユーモアの使用に関わる問題

分析状況は、空間に関わる場 field という視点と時間に関わるプロセスという視点から論じられてきた (Echegoyen, 2004)。本研究は、精神分析の治療的枠組みの中で分析家がユーモアを使用するには何が鍵となるのかを検討することを目的とするため、分析家と患者の両者の相互交流が生じる場の視点から検討を行う。Bader (1993) は、「ユーモアは分析家の中に位置する能力であるが、その表現は患者と分析家の間の相互作用的な場の原因と結果である」(pp.24-25) と述べ、分

析家によるユーモアの表現は、分析の場と密接に関わっていることを指摘している。

以下の項において、分析の場における三項関係を鍵概念としてユーモアの使用の検討を行いたい。分析の場は、患者と分析家の間の契約という三項関係を起点として始められる。この分析の場は、固有のルールに基づき固有の雰囲気を持ち、「この場所」という第三項として対象化して共に語ることでできる場である。そして、分析の場における営みは、この場における患者と分析家の間で起きる出来事を言葉により名付け第三項として共に見て、患者の心的世界を探索する営みである。先に精神分析におけるユーモアの項で指摘したように、ユーモアもまた三項関係的特徴を持つものである。この三項関係は分析状況とユーモアの両者に共通する鍵概念であるため、この視点をを用いて以下の検討を行うことにする。

4.1 分析家によるユーモアの使用に対する批判

先述したように精神分析においては、分析家によるユーモアの使用が躊躇や批判されてきた。ユーモアの使用の有害性をもっとも明瞭に指摘したのは Kubie (1971) である。彼はセラピストによるユーモアの使用は患者の自由連想を妨げること、他者から笑われたことによる傷つきの歴史を持つ患者に対し傷つきの再体験を引き起こすこと、セラピストの自己顕示欲の充足や患者への誘惑のために用いられること、セラピスト自身と患者の不安の防衛として用いられ両者の共謀をもたらすことなど、セラピストによるユーモアの使用が患者に対して、そして治療そのものに対して破壊的な影響を及ぼすものであると主張している。彼は、特に、ユーモアはセラピストの自己観察と自己修正の努力を鈍らせ、セラピストの欠点や逆転移の行動化から患者を守るためにつくられた精神分析の技術的な工夫を微妙で捉えがたい方法で回避するため、患者を傷つけたり、治療を破壊したりする危険を孕んでいることに注意を喚起している。

Kubie (1971) の指摘から見えてくるのは、分

析家によるユーモアの使用は逆転移の行動化となる危険が大きく、患者が分析家との対話の中で自分自身を検討し理解しようとする分析的な営みの基盤となる三項関係を失わせる可能性が大きいということである。それは意識的、無意識的に患者に対する敵意の表現となり患者を傷つけたり、患者と共謀して分析的な作業を回避し、転移的な充足をする二者関係に陥ったりしやすいということである (Baker, 1999)。いずれの場合も、分析の場が病理的対象関係の反復で満たされ、その反復を第三項とした分析作業は行われなくなる。Baker (1999) は、思慮のないユーモアの使用は、分析家が中立性の保持された空間から離れて、患者の転移を充足させる対象になり、自分の逆転移の行動化をする危険を有していると述べている。

Meissner (1999) は、治療関係を、転移／逆転移、現実の関係、治療同盟の三つの軸に分け、それぞれの軸とユーモアの関係を検討している。彼は、治療的作業は治療同盟の軸において行われるものであるが、分析家がユーモアを用いるときには、それが抵抗と防衛により転移／逆転移の領域か、現実の領域のどちらかに傾きやすいことを指摘している。いずれも、転移的二者関係に陥るか、社会的関係となり、分析作業の基盤となる三項関係は失われてしまう。

以上より、精神分析において分析家によるユーモアの使用が批判されてきたのは、それが分析の場における三項関係を失わせる可能性を孕んでいることが大きな理由としてあげられる。発話はアクションであり (Poland, 1990)、ユーモアの表現は多元的なコミュニケーションである (Bader, 1993)。したがって、意図的に患者を傷つけることは論外であるが、そのような意図がなかった場合でも、患者を傷つける危険があり、さらに精神分析的な作業そのものから逸脱する危険があることを認識する必要がある。

4.2 分析状況におけるユーモアの使用の意義

上述したような躊躇や批判がありながらも分析

状況におけるユーモアの使用の意義を主張する分析家は、どのような意義を見出しているのであろうか。

まず第一に、分析家によるユーモアの使用は、治療同盟の基盤となる分析家への信頼の形成に寄与する働きをする。Bader (1993) は、「ユーモアのモーメントは、分析家の『人間らしさ』の体験の中でもしばしば重要であり、患者にとって同盟とパートナーシップの感覚が楽しめる印となりうる」(p.23) と述べている。

つぎに、分析家によるユーモアの使用は、治療同盟の強化や、転移反応が先鋭化している状況において同盟関係の回復のために寄与する働きをする。Poland (1971) は、治療者によるユーモアの使用が治療的展開の起点となった二つの事例を提示し、ユーモアは同盟が比較的強くポジティブであるときにもっとも分析的作業を促進するチャンスになると指摘している。Meissner (1999) は、ユーモアは前提条件としての同盟を必要とするだけでなく、弱くなったり不確かな同盟を回復させたり、転移反応優位になっている状況を克服し、治療作業を進める役にも立つと述べている。このことを明瞭に描いているのは、Bader (1993) である。彼は、古典的な精神分析の技法が幼少期の親との関係におけるトラウマの再演として体験される患者の事例において、分析家によるユーモアの使用が治療の行き詰まりを打開し、分析過程と治療の成長促進的な効果をもたらすことを示している。このように、分析家によるユーモアは、分析状況における三項関係が弱くなったり失われたりしている状況において、その回復や強化のために作用する可能性をもつと言える。

第三に、分析家によるユーモアの使用は、分析の場は無意識への接近の刺激となる第三項を導入する効果がある。Grotstein (1999) は、いくつかの事例をあげて、「分析過程におけるユーモアは、特に〔音の共通性を含む〕洒落 puns の形態においては、しばしばそうでなければ深く覆われ、抑圧されていたものが表層に上がってくことを可能にする無意識の『天才』を反映してい

る」(p.83)と述べ、無意識の意識化と関連する視点で分析家によるユーモアの意義を強調している。また、Baker (1999) は、「患者と分析家の健康な同盟のもとで、勝利を収め、成長を促進するのは、ユーモア的なコミュニケーション（解釈）に含まれている一次過程の限定的な使用である」(p.121)と述べ、無意識の思考過程の特徴である一次過程の使用の意義を主張している。

第四に、ユーモアには、分析の場における移行空間の生成に寄与する第三項を導入する働きがある。Giovacchini (1999) は、「精神分析的な治療の課題は、恐ろしい現実をプレイフルなファンタジーに変換することであり、このことは移行空間において生じる」(pp.92-93)と主張し、この変換はしばしばユーモアを伴うものであることを指摘している。そして、移行空間の生成と回復に治療者のユーモアが果たす働きを、パラノイアの病理を持つ科学者との分析作業の事例の生き生きとした描写とともに描いている。筆者は、精神分析の事例ではないが、統合失調症の患者の集団精神療法の事例において、セラピストによるジョークの使用が移行空間を生成する技術として有効であることに言及したことがある (Ishikawa & Kotani, 2005)。Barron (1999) も指摘しているが、Winnicott (1971) の移行空間における遊ぶことという極めてオリジナルな考えは、分析状況におけるユーモアの探求に新しい理論的な道を開いたと言える。

ここにあげた四つのユーモアの治療的意義は、それぞれに独立したものではなく、同じ現象の異なる側面である場合も多い。最初の二つは、治療同盟を基盤とした三項関係の生成と強化、そして回復に関わる働きである。最後の二つは、分析状況に無意識系の思考過程の特徴である一次過程と前意識－意識系の思考過程の特徴である二次過程の相互作用を生む場を生成する働きである (Giovacchini, 1999; Grotstein, 1999)。これは精神分析に固有の場であり、分析家によるユーモアは、そのような場をつくり出す遊び道具としての第三項となりうる。第三の意義は一者心理学、第

四の意義は二者心理学の文脈でそのことを描いたものと言える。

4.3 分析状況におけるユーモアの治療的使用

最後に、精神分析の治療的枠組みの中で分析家がユーモアを使用するには何が鍵となるのかを検討したい。これは本研究の中心的な問いである。この問いは次の Baker (1999) による問いに端的に言い表されている。すなわち、「われわれはどのようにして分析家の禁欲と中立性を守ると同時にユーモアを治療的前進と精神分析的洞察に資するものとして用いることができるのか？」(p.117)。

分析状況におけるユーモアの使用に関わる葛藤

この問いに対しては、①ユーモアの使用は解釈に近似のものに限定すべきであること、②治療同盟の重要性、③分析の場において自然発生的なものであること、の3点が主要な主張である。①に関して Baker (1999) は、分析家によるユーモアの使用は解釈、特に転移解釈に近似のものとしての使用に限定すべきであると主張している。彼のこの主張は、ユーモアの使用の手続きを分析の中核作業である解釈に限定することで逆転移のエナクトメントによる患者および治療の破壊を防ごうとするものであり、その意図はよく理解できる。しかし、分析家が転移解釈として用いているつもりでも、実際には逆転移の行動化や解釈という行為への依存となっている場合もありうるため (Bader, 1993)、これのみを条件とするのは十分ではないだろう。また②に関して、ユーモアの使用の前提として治療同盟の存在を強調する意見がある (Poland, 1971; Baker, 1999)。しかし、Meissner (1999) が Poland (1971) の事例を引用して指摘しているように、転移反応が顕著になり分析関係が負荷をかけられているときにユーモアの使用によって治療同盟が回復し、患者の観察自我が回復している事例が複数見られる (Bader, 1993; Poland, 1971; Giovacchini, 1999)。Poland (1971) は、「統合され、適切で、自然発生的な

ユーモアは、高い程度の同盟の指標である」(p.637)と述べている。これは臨床感覚としては理解できるが、結果論で合理化として用いられる可能性もある。このように、治療同盟の存在は、前提条件と産物の両方に用いられておりその位置づけは明瞭ではない。そして、③に関しては、分析状況においてユーモアの使用が有効となるのは、それが予め準備されたものでなく、セッションのそのときその場で分析家の心の中に自然発生的に浮かんできたときのみであるという主張である(Baker, 1993; Grotstein, 1999; Poland, 1971)。これはユーモアが、いまここの分析の場の二者の相互作用の中から生まれてきたことの重要性を指摘する主張であり、ユーモアの使用の必要条件であると言えよう。

あらためて上記の問いについて考えてみたい。真摯に精神分析を行おうとするものはユーモアの使用に際して、必ずこの問いに直面すると言っても過言ではないだろう。分析作業の成果として患者の成熟したユーモアの獲得に高い価値をおくPoland (1990)は、分析家がユーモアを使用することに関しては歯切れが悪い。彼は20年前にはKubie (1971)のセラピーにおけるユーモアの使用の危険性を指摘する論文への応答としてユーモアの使用の価値を爽やかに主張していた(Poland, 1971)。しかし、この論文では慎重な姿勢をとっており、分析家がユーモアを使用することの考えられうる利益と危険の両方を考える必要性を主張している。一方、Bader (1993)は、特定の患者との治療を展開するためには、分析家の禁欲と中立性という理論のもとでは批判されもする分析家によるユーモアの使用という行為が治療を展開するという臨床事実があることを強調し、このことは我々の理論、すなわち、分析家の禁欲と中立性へのチャレンジではないかと主張している。彼の強調点は、分析家が禁欲と中立性という概念に依存することの有害性とユーモアの使用がそれを打開するという事実の主張にある。それに対して、Baker (1999)は、Bader (1993)がユーモアの使用により治療の行き詰まりを打開し、

分析を生き返らせようとすることは精神分析ではないと厳しく批判している。彼は、そのようなユーモアの使用は問題を解決するよりも分析作業を困難にする危険が大きいことを強調している。これらの分析家たちの葛藤からわかるのは、分析家によるユーモアの使用は、創造性と破壊性の両刃性を持つ行為であるということである(Kubie, 1971; Poland, 1990)。しかし、創造性と破壊性を持つのは、ユーモアだけではない。分析家の禁欲と中立性もまた、それが逆転移の行動化として用いられったり、分析家が隠れ蓑として用いたりするとき、分析状況における三項関係を失い、分析の場において破壊的なものとなりうる(Bader, 1993; Giovacchini, 1999)。

分析家の禁欲と中立性の再検討

ここで、分析家の禁欲と中立性²の意味を本研究のテーマの文脈に絞って再検討したい。この両概念は、現代の精神分析において議論の多い概念ではあるが(Makari, 1997)、精神分析技法に関して定評のあるテキストを書いたEchegoyen (2005)は、技法としての禁欲規則の重要性を主張している。彼は先ず、禁欲規則とは、「分析家は患者の欲望一般—そしてもちろん、特に患者の性的欲望、を充足するべきではないという事実」(p.523)を指し、それは原則としては被分析者に適用されるものだが分析家にも同様に適用されるとしている。そして、Stone (1961)の言う「大いなる落ち着きと程度を抑えた厳格さ」という態度が禁欲規則と中立性を技法として用いる上で重要であるとしている。この禁欲規則と中立性という態度は、「両方の参加者によって技法的な手段としてもっともよく理解されるものであり、その手段を伴うことにより、関心を持った医師は彼の患者をもっともよく助けることができる」(Stone, 1961, p.33; 強調は原著者による)。すなわち、禁欲と中立性という態度は、分析状況を構成する態度として分析家と患者の双方により分析作業のために必要な態度として認識される技法である。換言すると、分析状況における第三項として位置づ

けられるものである。Langs (1977) もまた、分析状況をバイパーソナル・フィールドという概念で構成する中で、禁欲と中立性を含むバイパーソナル・フィールドのルールは、「厳格な命令や絶対的な法ではなく、患者の分析経験のためのもっとも良いコンディションを作り出す健全で、臨床的に妥当な信条である」(p.30) と述べている。したがって、分析家の禁欲と中立性は、分析の場において、患者の欲望を即時的に充足させないことで患者の分析作業を進めるために必要な技法であると言えよう。このことは、換言すると、患者が自身の欲求不満に直面し、その経験から自分自身について学ぶことができるようになるための技法であると言えよう。この欲求不満に注目した分析家に Bion (1962a) がいる。彼は、思考の成熟のために欲求不満に対する耐性を持つことの重要性を指摘している。Bion の臨床理論の入門書を書いた J. & N. Symington (1996) は、「心の成長をもっとも決定的に左右するのは、欲求不満を回避するか、直面するかの決意である」(邦訳 p.87) と述べている。このことを踏まえると、分析家の禁欲と中立性は、「患者の欲求不満の回避ではなく、その保持と直面、そして探求と修正をできる場の生成」の為に用いられる技法とすることができるだろう。

この視点を置くと、この節の冒頭で述べた問いは、次のように再定式化できる。すなわち、「われわれはどのようにして患者の欲求不満の回避ではなく欲求不満への直面とその修正のための場を生成するためにユーモアを用いることができるのか？」という問いである。この問いは、本節の冒頭で述べた問いに対する部分的な答えであり、問いの精緻化である。すなわち、分析状況において分析家がユーモアを使用する意図を明確にしているものであり、その意図を実践する際にどのようなことが鍵となるのかという問いである。

以下、分析状況におけるユーモアの使用について考察している論文に掲載されている精神分析の事例を用いて、この問いを検討したい。

5. 事例の分析

先行研究に掲載されている事例は二つのカテゴリーに分けることができる。一つは、相対的に治療同盟が安定している文脈での使用であり、もう一つは、転移反応が先鋭化し治療同盟が失われている場面での使用である。

(1) 相対的に治療同盟が安定している場面での使用の事例

表1に示した二つの臨床素材は、相対的に治療同盟が安定している文脈でユーモアが用いられた事例である。Grotstein (1999) の事例においては、語の共通性や類似性に基づく言葉遊びを用いた解釈として分析家がユーモアを用いることで、自分の葛藤の無意識的源泉を第三項としてみる新たな視点が生まれた。また、Poland (1971) の事例においては、分析の場における転移のエナクトメントに対して、患者の父親の言葉をユーモアとして導入することで患者が自分の転移のエナクトメントを対象化してみることができた。いずれの介入もこの介入の後に患者の観察自我の機能が回復し、自分の防衛的特徴や転移のエナクトメントを第三項として見る事が出来るようになり、その無意識的な葛藤を探求することが可能になっている。換言すると、分析家によるユーモアを用いた介入は、分析の場における遊びを伴う三項関係の形成をもたらし、患者の欲求不満の回避ではなく、患者が欲求不満に直面しながらも、遊びのある雰囲気の中かで、異なる視点からその欲求不満に関わる自分自身の葛藤を見ることを可能にした。この二つの事例で、患者が自分の欲求不満に直面し、三項関係的に分析作業をすることを可能にしたのは、ユーモアの内容だけでなく、それを用いる分析家のユーモラスな態度が重要であったと考えられる。なぜなら、同じ内容のユーモアであっても、分析家の逆転移の行動化として用いられたなら、患者を傷つけたり患者と共謀したりして治療同盟に基づく三項関係を失い、分析作業そのものから逸脱することにもなりうるからであ

表1 相対的に治療同盟が安定している場面でのユーモアの使用

Grotstein (1999)	Poland (1971)
ある患者は、幼児期にコリック（黄昏泣き）に苦しんでおり、大人になってからは慢性的な不安に苦しんでいた。この患者は、あるセッションで、結婚している同僚に対する性的な感情に悩まされていると語った。この発言のエディパルな転移的な含意について扱った後で、私は次のように言った。「あなたのコリックの赤ん坊の自己 (your colicky infant self) は、跳ね回ること (being frolicky) に怯えているみたいですね」。これを聞いて、患者は爆笑して、いかに長い間コリックの自己が彼女の官能的な自己を締め付けていたかを吟味し始めた。	ある43歳の女性患者は、私との精神分析の二年目に入っていた。彼女はいかに彼女の父親が性的表現や攻撃的表現のために大人向け過ぎると思う本を彼女が見ることを妨げてきたかを非常な怒りとともに語った。子どものとき、彼女がそのような本を見たいと言ったときはいつでも、彼は、「駄目だ、これは男の本だ!」と言って彼女の要求を退けた。その後、患者は最近の夫の態度についての不平を話し続けた。彼女は次の20分間男性一般についての不満を言うことに費やした。その後、彼女は私との分析作業に対する不満について、特に私からほとんど何も得ていないと、語った。そして、彼女はカレン・ホーナイについて多くのことを聞いており、ホーナイの自己分析に関するアドヴァイスについて学ぶことにとっても関心があると語った。ここで患者は、私の本棚にあるホーナイの論文集に気づいた。彼女は私にこの本を借りる許可を求め、それに対して私は答えた。「駄目だ、これは男の本だ!」。これを聞いた患者は最初に笑い、そして私が彼女を笑わせようとしてこれを言ったことを理解した。これに続く作業は、彼女の父親転移の歪曲を明らかにすることと関係していた。

る。この点に関連して、Grotstein (1999) は「技法を用いる態度」の重要性を指摘し、「ユーモアが適切であるなら、患者が最終的に彼もしくは彼女の思考や行動の葛藤するパラドックスを理解することをしばしば可能にするのはセラピストのユーモラスな態度である」(p.79) と述べている。ここでいう「ユーモアの適切さ」とは、ここまでの議論を踏まえるとそれが分析の場において自然発生的に生じたものであること、そして、このユーモアを用いるベクトルが欲求不満の回避ではなく欲求不満への直面を意図している場合であると言える。

(2) 転移反応が先鋭化し治療同盟が揺るがされている場面での使用の事例

次に転移反応が先鋭化し治療同盟に基づく三項関係が失われている場合の分析家によるユーモアの使用について検討したい。分析家による禁欲や中立性が問題となりやすいのはこのような場合である。なぜなら、患者の転移反応が先鋭化するとき分析家の逆転移の行動化が起きる可能性が大きくなるからである。(1) において、分析家のユーモアを用いた介入が患者の欲求不満の回避から直面への変化をもたらした際に、ユーモアを用いる態度の重要性が明瞭になったことから、ここでは、ユーモアを用いた介入をする前後の分析の場

のプロセスと分析家自身のプロセスに着目して分析を行う(表2)。

まず、4つの事例においてユーモアを用いた介入をする前の分析の場のプロセスを検討すると、いずれも転移反応が先鋭化し、その転移を第三項として対象化し探求するための治療同盟と患者自身の観察自我機能が働かなくなっている状態が続いていること、すなわち、治療同盟に基づく三項関係が失われていることがわかる。分析の場において、患者は自身の欲求不満への直面ではなく、欲求不満を回避し、転移による空想的な欲求充足を求める力動が優位になっている。

つぎに分析家のプロセスを見てみると、ユーモアを用いた介入をする前の状態と介入の直前で、分析家の中に変化が起きたことが推察される。4つの事例においてユーモアを用いた介入が行われる前に転移反応が先鋭化している状態のとき、分析家は欲求不満や絶望感、憤りや怯えを強く感じていたことが見てとれる。そして、その状態からユーモアを使用する直前に分析家の中で変化が起きている。Baker (1999) は「この状況にいつもと違う感じで接近していることに気づいて」(p.120) と記述しており、Giovacchini (1999) は患者が比喩でなく文字通りの意味で分析家が彼の脳をほじくると言っていることを「可笑しく感じるようになり」(p.102) と記述し、分析家自身

表 2 転移反応が先鋭化している場面でのユーモアの使用

	Poland (1990)	Baker (1999)	Bader (1993)	Giovacchini (1999)
分析の場のプロセス(事前)	男性患者は、治療初期には分析および分析家への理想化の転移が顕著であった。数ヶ月後、患者は分析家の言うこと全てを分析家の欠点として指摘するようになり陰性転移が顕著になった。あるセッションにおいて、陰性転移が顕著になっていて、陰性な転移が顕著になっている状態のなかで患者は、「私は以前あなたすべての言葉に縛り付けられていた」と分析家を非難した。	サイコセラピストになる訓練を受けた女性患者は、スーパーバイザーへの不満を言い続けていた。患者がスーパーバイザーからの批判を招くような方法で素材を提供しているというマゾヒスティックなパターンを分析家が解釈しても患者はそれに反対し拒絶した。	30代の男性患者は、面接室の外での出来事に対する転移外解釈には反応しているが、同様のことが分析家との間で起きていることは否認していた。作業が進展し、分析家との関係が近くなるにつれ、分析家に対する陰性転移が顕著になった。患者は分析家から非難され責められていると敏感になり、分析家を攻撃することが続いた。分析家は沈黙するなど禁欲規則のカードをきるか、二人の間で起きている出来事に対する様々な解釈を試みてみたが治療は行き詰まり状態に陥っていた。	パラノイア傾向を持つ科学者の男性患者は、パラノイアが顕著になって行動化した後、強制入院させられ二日後に退院した後のセッションで、精神病性の陰性転移を起こしていた。患者は分析家を彼の妄想の中に組み込み、敵とみなしていた。そうすることによって、分析家としてのGiovacchiniを疑い、分析家を彼の精神病理の一部にした。分析家の持っているサボータージュな性質はなんでもあれもはや効力を発揮せず、患者は分析家を観察する協力者の位置から外した。
使用前後の分析家のプロセス	分析家は「今は、私は私の全ての言葉に縛り付けられている」と応答した。この時点で分析家は自身の憤慨と患者の観察自我とコンタクトできない無益感を受容していた。上述したユーモアの表現は自分の力の限界の受容と自分を欲求不満にさせる患者の力を認めるものであった。	患者の反復パターンに対して、この場面では、「この状況にいつもと違う感じで接近していることに気づいて」、ユーモアを伴う介入した。	分析家は欲求不満と増大する絶望感をなんとかしようとしてコンサルテーションと自己分析を求めた。そこで得たパーソナルな洞察は、自分の無力感と怒りを調節する助けとなり、患者が自分に遊ぶよう強制してきた「参与することを強いるルール」から自由になり、彼の葛藤を共感的に理解できるようになった。その中で、分析家は患者に対して遊びのある関わりができるようになった。	セッションの初め、分析家は患者がしたこととはひどく悪性でおぞまし精神病的精神的エピソードと退行であると、怯えながら見ているという患者が文字通りの意味として語っている話を聞きながら、分析家は彼の話が可笑しく感じるようになり、その後ユーモアを伴う介入を行った。
分析の場のプロセス(事後)	患者はこの介入に対して笑い、分析の場における内省能力が増大した。後の治療展開において、力と無能感のテーマが、彼の分析作業の中心になった。	分析家が驚いたことに、患者は初めて自分のマゾヒスティックな傾向を連想して、この傾向と母親との関係の関連を認めた。患者は自分が分析の場を一杯に満たしていた不平は、分析家もまた患者を批判するようエナクトすること引き返もうとする同じ努力の一部であることを自分で見ることができるようになった。したがって、患者は分析家を転移的対象ではない存在として見られるようになり、転移的な歪曲を分析することができるようになった。	患者の辛辣な愚弄に対して、分析家は以前のような沈黙や差し出された洞察ではなくユーモアで応えるようになった。このように介入を繰り返す中で、患者は分析家と一緒に遊ぶことができるようになった。そして、分析家とユーモアやジョークを伴うやり取りをする中で、子ども時代を母親との体験と分析家との間で起きている体験を関連づけて検討できるようになった。患者は分析家と一緒にいる場において自己省察の能力が高まり、分析家と協働作業をすることができるようになった。	介入の前で面接の雰囲気はがらりと変化した。分析家がユーモアを伴う介入をしたとき、患者の態度は突然変わり、まったく違う状態になった。患者は、笑って「脳をほじくるところ」がメタファーであることを理解し始めた。その後、患者は著名な科学者たちが知っていることのすべてを知るために彼らの脳の中に入りたいと思ってきたことを語った。患者はセッション始めの恐ろしさを示していた態度とは一変して、再び遊び心を持てるようになって、ここ数日の彼の行動化の出来事を自分でも驚きながら振り返った。

の内的な変化を明瞭に記載している。二人とも、自分と患者の間で起きている出来事を異なる視点で見ることのできる新たな視点が自分の心的空間に生じたことを示している。また Bader (1993) は治療の行き詰まりが続いている状態においてコンサルテーションと自己分析により、患者の強烈な陰性転移を異なる視点から見て理解する空間が自身の中に回復したことを書いている。Poland (1990) は、論文中にこの変化を明瞭には記載していないが、陰性転移が顕著になっている状態において患者が「私は以前あなたの全ての言葉に縛り付けられていた」と彼に怒りをぶつけたのに対して、「今は、私は私の全ての言葉に縛り付けられている」と機転を利かせた応答している。ここで、彼からユーモアが生み出されたところには、彼が患者からぶつけられた怒りを自身の心の中で消化し、ユーモア的な表現に変形する作業が行われていたことが推察できる。このように分析の場に治療同盟に基づく三項関係が失われた状態において分析家がユーモアを用いた介入をするところには、分析家が自身の逆転移反応を覚知し、自身の欲求不満に直面し、自分と患者の間に起きている転移－逆転移反応を「脱中心化」(Grotstein, 1999) する心的空間の回復が生じたと理解することができる。すなわち、転移－逆転移反応に巻き込まれている患者の視点と自分の視点とは異なる第三の視点が分析家の心的空間に生じたと言える。Freud (1927) はユーモアの働きを厳しい現実と直面して怯える自我に対して優しく元気づける超自我の声とした。この第三の視点はそのような超自我の声であると言ってよいだろう。Giovacchini (1999) は、自らの逆転移反応に対してユーモア的な寛容さを持つことの重要性を指摘しているが、これはまさに、第三の視点を回復する働きである。

以上より、分析の場に治療同盟に基づく三項関係が失われた状態のとき、分析家の心的空間は転移－逆転移反応により内的な三項関係を失い、分析家としての機能を十全に果たせなくなっていたことが推察される。そして、分析家が内的に第三

の視点を回復することで、分析の場を異なる視点で見ることができ、そこで分析家の心の中にユーモアが生じたときにそれを介入として用いることで、分析の場の雰囲気の変化をもたらすことが可能となった。すなわち、転移－逆転移反応による膠着した遊びのない雰囲気から、遊びのある雰囲気への変化である。そしてその場の雰囲気の変化は、治療同盟と患者の観察自我機能の回復、すなわち、治療同盟に基づく三項関係の回復を伴うものであった。

治療同盟に基づく三項関係は、つねに固く維持されているものではない。それは、原則として保持されるように作業が営まれるが、転移－逆転移反応により一時的に失われるときもある。この三項関係が失われた後に新たな驚きとともに回復するとき、新しい分析的な洞察が生じると考えられる。転移が先鋭化し治療同盟に基づく三項関係が失われた状態が続くとき、この運動が起きずに分析家と患者の関係は硬直化してしまっている。このような状態においては分析家が自身に対するユーモア的な視点を伴う内的な三項関係を回復することがユーモアの使用の鍵となる。ここでなぜユーモア的な視点が出てくるのかは精神分析固有の営みと深く関連していると考えられる。この点については他所で詳細に論じたい。

6. 分析状況におけるユーモアの治療的使用の鍵

以上より、分析状況における分析家のユーモアの使用の鍵として、まず「患者の欲求不満の回避ではなく、欲求不満への直面とその修正をすることのできる場の生成／回復のために使用する」というユーモア介入の意図を明瞭にすることの重要性があげられる。これは、患者と分析家の二人が共在し相互交流する分析の場という第三項を意識して介入をするということである。そして、その介入をする際の分析家の態度の要因、すなわち、ユーモラスな態度が重要である。このときのユーモラスな態度は、おかしみを伴い笑いを生み出す

ような態度であれば何でもよいというわけではない。Poland (1990) が「成熟したユーモア」について言及した際に述べた「他者の正当な評価と他者への敬意に基づく誇りのある慎み深さ」(p.198) を伴う態度でユーモアを用いる必要がある。転移－逆転移反応が顕著になっている場面においてこのような態度を持ち続けられるためには、分析家が自身の逆転移反応を覚知し、自身の欲求不満に直面し、それを第三の視点から見て脱中心化する空間が必要である。これは、Britton (1998) の「三角空間」という概念と関連する空間と言えよう。分析家によるこのような態度とともに用いられたユーモアの表現は、分析状況における二人の間で起きている出来事を対象化し、共に見ることができる第三項にする作用をもたらす。それは、分析の場に欲求不満に直面しながらそれと遊ぶ雰囲気を生み出す契機となる。ここで述べた分析家の態度の要因と、その態度の生成のために分析家に必要な心的な作業があるという点は、Bion (1962b) の α 機能の概念と密接に関連している。したがって、Bion の仕事を踏まえて検討することで、ユーモア介入の機序のさらなる探求ができる可能性が示唆される。

ここで、ユーモア介入を用いる際の治療同盟の要因について簡潔に言及しておきたい。治療同盟がユーモア介入の前提条件なのか、その強化と回復が産物なのかという点である。今回検討した事例においては、Giovacchini (1999) の事例のようにかつて治療同盟と移行空間が治療の場に存在していたことが前提となっていた可能性が考えられる。また、Bader (1999) や Poland (1971) の事例は治療同盟の水準は明瞭ではないが、陽性転移によるよい時間の共有が前提にあったことが示唆される。しかし、いずれも示唆されるに留まる。したがって、治療同盟の形成とユーモア介入の関係について今回検討しなかった治療プロセスの観点からの精緻な事例研究が必要になるだろう。

最後に、分析家の禁欲と中立性は、分析家のユーモアと常に対立するものではないことを改めて

指摘しておきたい。両者は、適切に用いられるなら、ともに患者が自身の欲求不満を回避することなく、それと直面することにより心的成長をするための作業を可能にする道具となりうる。分析の場における分析家の禁欲と中立性は、分析家と患者の双方が欲求不満の回避をしていないかの指標となる。また、ユーモアは、分析の場において欲求不満の体験を保持しながらも、不安全感や心的痛みに押しつぶされず、欲求不満と遊ぶことを可能にし、欲求不満を回避せず直面し、修正する心的作業を行う助けになると考えられる。

7. 結論

分析状況における分析家のユーモアの使用の鍵は、分析状況における三項関係の生成もしくは回復というユーモア使用の意図を明瞭にすることである。それは、「患者の欲求不満の回避でなく、欲求不満への直面とその修正をできる場の生成／回復のために使用する」という意図が前提となる。そして、分析家がユーモラスな態度でユーモアを用いることが重要である。さらに、転移反応が先鋭化し治療同盟に基づく三項関係が失われている場面においては、分析家が逆転移反応に代表される自分の欲求不満の覚知と保持、そして、それに対してユーモア的な態度を取ること、すなわち、内的な三項関係を回復することが鍵となる。

文献の概観と分析により導き出された上記の理解を、実際の精神分析臨床において検討していくことが今後の課題である。特に、このようなユーモアの介入が有用となる患者の特徴の同定、さらに患者の特徴にもとづくユーモアの使用の技法的工夫と留意点の同定を緻密な事例研究によりおこなっていくことが大きな課題となる。

文献

- Bader, M. J. (1993). The analyst's use of humor. *Psychoanalytic Quarterly*, 62, 23-51.
 Baker, R. (1993). Some reflections on humor in psychoanalysis. *International Journal of Psychoanalysis*, 74, 951-960.
 Baker, R. (1999). The delicate balance between the use

- and abuse of humor in the psychoanalytic setting. In (Ed). James W. Barron. *Humor and Psyche: Psychoanalytic Perspective*. Hillsdale: The Analytic Press, pp.109-130.
- Barron, J. W. (1999). *Humor and Psyche: Psychoanalytic Perspective*. Hillsdale: The Analytic Press.
- Bion, W. R. (1962a). The psycho-analytic study of thinking. *International Journal of Psychoanalysis*, 43, 306-310.
- Bion, W. R. (1962b). *Learning from Experience*. London: Karnac.
- Britton, R. (1998). *Belief and Imagination*. London: Routledge.
- Etchegoyen, R. H. (2005). *The fundamentals of Psychoanalytic Technique*. London: Karnac Books.
- Fabian, E. (2002). On The Differentiated Use of Humor and Joke in Psychotherapy. *Psychoanalytic Review*, 89, pp.399-412
- Freud, S. (1905). Jokes and their relation to the unconscious. *Standard Edition*, 8. London: Hogarth Press.
- (フロイト, S. (1905 / 2008).『機知—その無意識との関係』(中岡成文・太寿堂真・多賀健太郎訳). 岩波書店.)
- Freud, S. (1928). Humour. *Standard Edition*, 21: 161-166. London: Hogarth Press.
- (フロイト, S. (1928 / 2010).『フモール』(石田雄一訳). 岩波書店.)
- Giovacchini, P.L. (1999). Humor, the transitional space, and the therapeutic process. In (Ed). James W. Barron. *Humor and Psyche: Psychoanalytic Perspective*. Hillsdale: The Analytic Press, pp.89-108.
- Grotjahn, M. (1957). *Beyond Laughter*. New York: McGraw-Hill.
- Grotstein, J. M. (1999). Humor and its relationship to the unconscious. In (Ed). James W. Barron. *Humor and Psyche: Psychoanalytic Perspective*. Hillsdale: The Analytic Press, pp.69-86.
- Ishikawa, Y. & Kotani, H. (2005). On joke: a technique of creating psychological safe space for schizophrenic patients. *International Journal of Counseling & Psychotherapy*, 3, 93 - 97.
- 石川与志也(2016)力動的心理療法和ジョーク. 小谷英文(編)危機事態における力動的心理療法. 国際力動的心理療学会第19回・第20回年次大会論文集. pp.48 ~ 58.
- 北山修(1986)冗談と比喩—フロイトの機知研究から学ぶ精神分析研究, 29, 287-304.
- Kubie, L. S. (1971). The destructive potential of humor in psychotherapy. *American Journal of Psychiatry*, 127, 861-866.
- Langs, R. (1977). *The Therapeutic Interaction: A Synthesis*. New York: Jason Aronson Inc.
- Makari, G. J. Current conceptions of neutrality and abstinence. *Journal of American Psychoanalytic Association*, 45, pp.1231-1239.
- Meissner, S. J. (1999). Humor is a funny thing: dimensions of the therapeutic relationship. In (Ed). James W. Barron. *Humor and Psyche: Psychoanalytic Perspective*. Hillsdale: The Analytic Press, pp.131-158.
- Poland, W. S. (1971). The place of humor in psychotherapy. *American Journal of Psychiatry*, 128, 635-637.
- Poland, W. S. (1990). The gift of laughter: on the development of a sense of humor in clinical analysis. *Psychoanalytic Quarterly*, 59, 197-225.
- Strean, H. (Ed). (1994). *The Use of Humor in Psychotherapy*. Northvale: Jason Aronson Inc.
- Symington, J. & N. (1996). *The Clinical Thinking of Wilfred Bion*. London: Routledge.
- (森茂樹訳(2003)ビオン臨床入門. 金剛出版)
- Winnicott, D.W. (1971). *Playing and Reality*. New York: Basic Books.

付記

本論文の草稿を読み、貴重な意見をいただいた聖学院大学の大橋良枝先生と相模女子大学の荻本快先生に感謝いたします。

注

- 1 本論文においては、精神分析家をさす場合には分析家、精神分析家と心理療法のセラピストの両方をさす場合および引用文献にセラピストと記されている場合にはセラピストという語を用いる。
- 2 分析家の禁欲と中立性は、厳密には異なる概念である。しかし、本研究のテーマの文脈で用いられるときには両者を一括りにして扱うことが多いため(Bader, 1999; Baker, 1999 他)、本論文でも同様の扱いとする。

Therapeutic Use of Humor in the Psychoanalytic Situation

Yoshiya Ishikawa

Psychoanalysts have regarded use of humor in the psychoanalytic situation with suspicion and ambivalence. The main reason for that is their use of humor has the potential danger of violating the principles of abstinence and neutrality. The purpose of this paper is to examine how analysts can harness humor within the therapeutic framework of the psychoanalytic situation by reviewing previous studies on this theme. The following was found by the review and analysis of previous studies. First of all, the main problem of using humor by analysts is that it has a great potential to destroy an analytic situation. In other words, it is possible to destroy a triadic interaction inherent in the analytic situation. Secondly, a key for using humor by analysts in the analytic situation would be to clarify the intention of using humor, such as creation or recovery of triadic interaction in the analytic situation. In addition, it is important to consider the aspect of posture when using humor. Moreover, when a transference response has been intensified and a triadic interaction based on therapeutic alliance has been lost, recovery of internal triadic interaction for analysts will be a key for using humor.

Keywords: psychoanalytic situation, humor, abstinence and neutrality, triadic interaction